『無者キリスト』を読む （新宿集会にて）

第八転 「昇天」（橄欖山）

――第一部　キリストの実存十転――

２０２０年1月26日

弘野慶次郎

易しくて単純な十字架の道　第八転「昇天」　真の歓喜　みたまのバプテスマの徴　心の目を開いて　異言がほとばしる　聖霊降臨の約束　弁護者（助主）を遣わす　聖霊の働き　天に挙げられる　地の極まで　御霊の力

●易しくて単純な十字架の道

おはようございます。小池辰雄にはなかなか達することはできないけれども、これは神さまのなさることだから、その比較をしたらいけないんです。Ａの人とＢの人とＣの人と、比較は全然要らない。その人にキリストがなしてくださる、それが世界一であれば、それでいいので、比較することは、むしろ神さまに対する冒瀆だと思う。人間一人ひとりは天下一品につくられているのに、それを比較するなんてとんでもない。

「比較なんかするものではないぞ」

と言われそうですね。

僕はなぜこの所へ来て、こういうことをするか。わが家でもやはり『無者キリスト』を読む会をしていて、十人くらい集まってもらえるんですけれども。

僕は学生の時から小池辰雄に連なってきました。そして、70歳を超えた頃ですよ、小池辰雄の信仰の深さに驚いたわけです。改めて十字架の凄さに驚いた。そしたら、小池辰雄の凄さも段々わかってきて、

「これは放っておいたらいけない」

という思いになった。僕は

「何とかして本当のキリストの愛を、生命を知ってもらいたいな」

と。これほど凄い愛はないんです。もの凄く単純ですよ、十字架を受けるだけでしょ。そうしたら、そこにすべてが入ってくるということです。一人ひとりの存在がどれだけ大切で、どれだけ神に愛されているか、ということを僕は小池の信仰から非常に学びました。

「こういう信仰があったんだ」

ということを何とかして僕は知ってもらいたいなと思っている。もの凄く易しいんですよ、単純でありやさしい。それが十字架なんですね。それを何か難しくしてしまっている今のキリスト教会に対して僕は異を唱えたいくらいで、

「これほど易しくて単純な十字架の道というものはない」と思った。それを小池から学びました。御霊によって全部、そういうことを教えてもらった。何とかしてこの小池の信仰を、皆さんにちょっとでも知っておいてほしいなという思いがあって、こういう所に来て、しゃべっている。

●第八転「昇天」

今日は136頁の第八転「昇天」のところから読むことにいたします。

《第八転　昇天（橄欖山）

ゴルゴタに十字架の血を流し、贖罪の大業を果したイエス。その屍は岩窟の墓地に葬られたが、三日目の晨、地震ならぬ霊震起こり、岩窟の扉としてあてがわれた岩盤は転倒し、墓は既に空っぽである。彼は復活して現われ、弟子供、女どもを驚異せしめた。しかし彼らはまだ真の歓喜に甦らず、キリストにその心のかたくなさを責められる情けなさであった（マルコ16・14）。》

ここは昇天の前の、十字架のあと、墓に葬られて、墓が空っぽであって、復活されたということを、改めて昇天の前にちょっとおさらいしたような形でここに書いてくれている。その時、弟子たちはびっくりするばかりで、

「しかし彼らはまだ真の歓喜に甦らず、キリストにその心のかたくなさを責められる情けなさであった」

というようなことがあるけれども、ここに「真の歓喜」と書いてます。「真の歓喜」とは何ですかと、僕はこれを読んでいて、

「あっ、真の歓喜、これこそ大切なことだな」

と思った。

「真の歓喜（まことのよろこび）」

とは喜びのことです。キリストは喜びのことをちゃんと約束されている、本当の歓喜とは何かということを。

それを先ずヨハネ伝の15章からちょっと見ていきたいと思う。15章17節で、キリストはちゃんと約束されている。「真の葡萄樹」の弟子へのメッセージがあったあと、その続きとして11節からこういう言葉がある。

「11**これらのことを話したのは、**

「私につながっておれよ、私の中におれよ」ということを話した。その理由は、

わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。」

と書いてある。イエスは十字架にかかる前に、こういうことを仰った。

「**わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるため**

である。」

と。とにかく、イエスは、

「あなたがたが喜んでほしい」

ということをここでちゃんと約束されている。

「自分が十字架で亡くなって、復活して、ペンテコステがあった時に、あなたがたの内にはわたしの喜びが満たされるんですよ」

という約束なんです。それと同じことが17章13節にも書いてある。

「しかし、今、わたしはみもとに参ります。

これは「十字架であなたのところに参ります」ということ。

世にいる間に、これらのことを語るのは、わたしの喜びが彼らの内に満ちあふれるようになるためです。」

と書いてある。15章でも17章でもとにかく、イエスは、

「あなたがたの中に本当の喜びが生まれてくれないと私は死んでも死に切れない」

という感じですよね。これが、

「私の喜びがあなたがたの中に満ちあふれるため、心から喜んでほしい」

というのが十字架への道の約束なんです。

同じようなことがいっぱい出てくるんですけれども、16章20節から読んでみますと、

「はっきり言っておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。

これは十字架でみな散ってしまうでしょ。

「死んでしまったから、あなたがたは悲嘆にくれていく。世の中はそれで喜ぶかもしれないけれども」

ということが書いてあって、

あなたがたは悲しむが、この悲しみは喜びに変わる。女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。

これは十字架のことです。

「十字架でどれだけ苦しんでも、一人の人が助かれば、一人の人が喜んで生きてくれたら、それで私の十字架の贖いはもう充分だ。その喜びは、神さまの喜びはそういうもの。十字架で苦しんでも、一人の人が本当に生命に生きてくれたら、これほど神さまにとって喜びはないんだ」

ということを書いている。これはイエスの言葉ですから。

●真の歓喜

それでそのあとです、

「**ところで、今はあなたがたも悲しんでいる。**
十字架で悲しんでいる。
しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。
その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。」
と書いてある。
「一時的には悲しむけれども、やがて自分が昇天して、ペンテコステが起こった時には、あなたがたは心から喜ぶことになる。この喜びをあなたがたから奪い去る者はいない」
と。どんなことが来ても、十字架で贖われて、その十字架を受けとった時の喜び、生命の喜びは、誰も奪うことはできない、それほど凄いんですよ、ということをここでイエスが約束しておられる。それが
「真の歓喜」
ですね。
弟子たちは、空っぽの墓に行って、悄気(しょげ)て帰ってくるわけです。女たちは割合とそこに居るんです。マグダラのマリヤなんかはそこに居って、そしてイエスに出会うでしょ。弟子たちはもう
「墓は空っぽだった。誰か盗んだとちがうか!?」
とか言って、散々悄気て散り散りになっていくけれども、女性の方は全然違う。それでも、女性にしてみても、その時は動転しているし、喜びなんて全然なかった。ところが、十字架で復活されて昇天されてペンテコステが来たら、
「本当の喜びがあなたがたの内に生ずるんだ、私がお前の中で生きるから、真の喜びが復活するんだ」
と。ここに
「**真の歓喜(まことのよろこび)に甦らず**」
と書いてありますね。
「真の歓喜に復活するんだよ」
ということをここで小池が言う。小池辰雄はやっぱり本当の喜びを知っていたと思う。それだから、こういう言葉が出てくるんです。パッと出てくる。
「喜び」
ということに関していえば、いっぱい譬話(たとえばなし)がある。失ったコインの譬えもそうでしょ。その当時、コインというのは非常に貴重なものだったから、それを失ったら、何か最大の一つでも失った気になって、それを捜し回るわけです。捜し回って見つけたら、
「みんな喜んでくれ」
といって、しゃべるでしょ。あれは神さまの喜びのことなんですよ。それから、迷った羊

の譬えもあります。百匹がおってもたった一匹でも迷ったら、それを見つけたら、もう懐に抱いて帰ってくる。あれも神さまの喜びを言っている。

「失われた者がどこにもいないか」

という神さまの願いがあそこに入っている。それが迷った羊の譬えです。それから、放蕩息子の譬え。あの放蕩息子も、これは神さまが喜ぶ譬えですよ。

「死んでいたのに生き返った。宴会を開いて、楽しみ喜ぼうではないか」

と。あれが神さまの願いなんです。

「誰かが本当に私の所に帰ってきてくれたら、これほど嬉しいことはない」

という。あの三つの譬えは全部、神さまの喜びの譬えなんです。

「天に喜びがあります、天使たちが喜びますよ」

とか。親父さんは祝宴を開いて、もう下にもおかないような喜びようです。神さまは、

「みんなが喜んでほしい」

という神さまの願いがここに詰まっている。

ヨハネ伝をさっき読みました。15章と17章それから16章も読みました。それから、ルカ伝に出てくる失われたコインの譬えとか。迷っている小羊の譬え、放蕩息子の譬え。これは全部、神さまが、一人ひとり

「失われた者はいないか」

という願いをもって語られた譬えなんです。それほど神さまは一人の人が救われること、一人の人が本当の生命に入ってくれることがどれだけ嬉しいかというのは、神さまの方の喜びなんです。

「まだ真の歓喜に甦らず」

と書いてますけれども、私たちの喜びではないんです、これは神さまの喜びなんです。この譬えのところに全部、

「一緒に喜んでほしい」

と書いてあるでしょ。友人をつれてきて、失われたコインの譬えもそうですよ。みんなにしゃべりまくるわけです。

「見つけたよ、みんなで一緒に喜んでくれ」

というわけです。放蕩息子の譬えもそうですよ。

「みんな一緒に喜んでくれ。そういう思いにみんななってほしい」

というのが神さまの本当の願いなんです。これは神さまの喜びを私たちが喜ぶんですよ。自分の喜びを喜ぶのではない。人間の喜びなんてたかが知れている。

「本当の喜びは神さまの喜びを自分の中で喜ぶ」

というようなことが大切です。これが「真の歓喜」ですよ。決して人間的な喜びではない。

「神さまの喜びを喜ぶ、イエスの喜びを喜ぶ」

ということが非常に大切であるということなんです。

これはパウロもピリピ書とかテサロニケ書なんかでも、

「喜べ、喜べ」

と言っているでしょ。あれは、

「これだけ凄いことをなさったのに、何であなたがたは喜ばないのか」

というような嘆きもありますよ、

「喜んでほしい」

というパウロの思いが。けれども、それは単なる人間的な喜びではない。

「神さまの喜びを本当に、神さまの喜びを喜びとして喜んでほしい」

というのが本当の喜びで、パウロが散々「喜べ、喜べ」と言っているのもそういういきさつがある。パウロはそれで本当に凄く喜んで生きていた人だと思う。だから、そういう言葉が自ずとパウロの口から出たのだろうと思います。

●みたまのバプテスマの徴

《さきにもルカ福音書第24章の「復活」のところで書いたように、イエスは、エルサレムで弟子たちに、父が約束なさったもの、聖霊をおまえたちに贈るぞ、おまえたちは天上から霊の能力が著せられるまで都に留って祈って待って居ろよと、確言なさったが、その後、ガリラヤでも現われ、全世界を巡って、凡てのものに福音を宣べ伝えるべきこと、信じてみたまのバプテスマを受ける者は救われること、そのように信ずる者には徴がともなうことを語った。すなわちキリストの聖名を唱えれば悪鬼が追放され、異言がほとばしり、蛇を握っても、毒を飲んでも、害を受けず、病める者に手を按けば病は癒される、といった徴が伴うことを告げた。これは事実、聖霊を受けた使徒たちが実証した。

みたまのバプテスマをはっきり受けなくては、こういう徴は伴わない。だから

「信じてバプテスマを受ける者は救われる」（マルコ16・16）

という聖言をいい加減に読んでいる一般キリスト教界ではこのような徴が伴わない。だから「使徒的信仰に立ち帰ろう!」と私は自らにきびしく告げているのである。》

ここで、最初の所はマルコ伝とルカ伝のところから引用されている言葉です。

「父が約束なさったもの、聖霊をおまえたちに贈るぞ、おまえたちは天上から霊の能力が著せられるまで都に留って祈って待って居ろよ」

これはルカ伝24章36節に出てくる。この言葉はどういうところで語られているかというと、復活されたイエスが弟子たちに現れて、魚を食べたところなんです。復活されたイエスが焼いた魚を食べられる。これは生身の人間が食べているみたいな感じですけれども、

「復活されたキリストが焼いた魚まで食べる」

という、とんでもないことが起こって、そのあとでイエスがこういう言葉を残しておられる。

「イエスは、焼いた魚を取って彼らの前で食べられた。

その次に、この言葉がある。

イエスは言われた、「わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩篇に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。

と。預言は必ず実現するんです。

それこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。」そしてイエスは聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて、言われた。「次のように書いてある、『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらのことの証人となる。わたしは、父が約束なさったものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまで都に留まっていなさい。」

この最後のところですね。

「わたしは、父が約束なさったものをあなたがたに送る。高い所からの力に覆われるまで都に留まっていなさい。」

そこを小池が引用しているのが、今読んでいただいたところです。この聖書との違いは、

「父が約束されたもの」

と聖書にはそれだけしか書いてないけれども、はっきりと小池は、

「聖霊をおまえたちに贈るぞ」

と。この「おくる」も聖書では「送る」と書いてあるけれども、ここでは「贈る」と、

「プレゼントとしてお前たちに贈るぞ」

という、漢字を使っています。それから聖書には

「高いところから力に覆われるまで」

と書いてあるが、

「おまえたちは天上から霊の能力（ちから）が著（き）せられるまで都に留って祈って待って居ろ」

と。「天上から」という言葉――小池は「天」という言葉が好きでした。「天鐘」とか「天震」とか「天」のつく号を非常に用いた――

「天上から霊の力を着せられるまで」

という。「着せられる」というのと「覆われる」というのと、どちらでもいいでしょうけれども、小池は

「能力（ちから）が著（き）せられるまで都に留まっていろよ」

というふうに訳しておられます。

それからそのあとの約束はマルコ伝からきている。マルコ伝16章の、「弟子たちを派遣する」

というサブタイトルがついているけれども、これはルカ伝と非常によく似ている。

「その後、十一人が食事をしているとき、イエスが現れ、その不信仰とかたくなな心をおとがめになった。」

という。復活されたイエスが魚を食べられる、それと同じところだろうと思うけれども、

「それから、イエスは言われた。「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。信じて洗礼を受ける者は救われるが、信じない者は滅びの宣告を受ける。信じる者には次のようなしるしが伴う。彼らはわたしの名によって悪霊を追い出し、新しい言葉を語る。」

ここは小池は、「新しい言葉」の代わりに、

「異言がほとばしり」

と書いている。そして、

「毒を飲んでも害を受けない。病の者に手をおけば癒されるというしるしが伴う」

と、小池はマルコ伝をこんなふうに訳している。

●心の目を開いて

もう一度、さきほどのルカ伝24章に戻りますけれども、ここにもの凄くはっきりとこういうことを書いている。45節、

「そしてイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて」

と書いてある。心の目が開けないと、キリストの言葉は全然わからないんですよ。パウロも言っているように、

「心の割礼こそが本当の割礼です。心が開かなかったら、全然あなたがたは何も分からないんですよ」

と。この弟子たちはまだ半信半疑でしょ。復活したキリストと一緒に食事をしながら、それでもまだキリストの言っていることがよく分からない。ここに

「イエスは聖書を悟らせるために彼らの心の目を開いて」

と書いてある。「心の目が開ける」というのは、ペテロが

「あなたこそ生ける神の子、キリストです、メシヤです」

と告白したことがありました。あの時もイエスが褒められたのは、

「それはあなたから出たのではない。父が教えたから、そういうことを言ったんですよ」

ということを言ってます。それと同じように、心が開けて、ある程度の御霊が入ってこないと、本当のことが言えない。本当のことを分かろうとしたら、神さまから心を開いてもらわないと。自分で開くのではない。自分で開けるものではないです、こういうものは。神さまが開いてくださったから、

「悟らせるために、彼らの心をイエスが開いて、語られた」という。そうでないと、この言葉は聖書として残ってないはずなんです。これは心が開かれて、上から開かれたから、イエスの言葉がはっきりと入ってきた。だから、三日目に甦って、ペンテコステを約束して、そして十字架で心が本当に砕かれて開けられたら、

「それこそあなたがたは力に覆われて、伝道に立つんですよ」

ということがここに書かれてある。

「神さまが心を開く」

ということが非常に大切なんです。

あのエマオ途上のときもそうでした。弟子たち二人が第三者の旅人と一緒に行くけれども、ずっと行っていても、これがイエスであるということが分からなかった。食事をしてお祈りをされた時に初めて、ハッと気付く。あれも心が開かれた瞬間ですよ。神さまが心を開いてくださらないと、キリストがなんぼ近くにおられても分からない。

大部分の人が、クリスチャンでない人は、聖書のことは全然分からないですよ。これはみんな心が閉ざされているからなんです。教会とか、そういう所で皆さん礼拝されたり、こういう所で読書会をしたり、何かする場合でも、神さまに祈って、

「心が開いてもらわないと、私たちは本当に神さまの言葉が理解できない」

というようなことで、心の目が開かれるということは非常に大切なんです。それは、自分では決してこういうものは開けるものではない。それがルカ伝に書いてあることです。はっきりとそういうことがルカ伝に書いてあったなんて、僕は改めてびっくりした。24章です。

「彼らの心の目を開いて」（ルカ24・45）

と書いてあるのを、非常に僕はびっくりしました。

●異言がほとばしる

それから、あなたがたに新しい言葉を語るという。これは聖書には

「新しい言葉を語る」

と書いてあるけれども、ここを

「異言がほとばしり」

と小池は書いてます。この「異言」という言葉よりも、

「ほとばしる」

という言葉に小池の思いがあると思う。「ほとばしる」というのは、うちに留めておけないという感じがします。「ほとばしる」ということを、キリストがリアルにしゃべっているところがヨハネ伝4章14節です。イエスがサマリヤの女と問答された時に残された言葉がこれですよ。

「あなたが汲んでいる水は、飲んだらまた渇く。本当に生きた水をわたしは持

っているんだよ」

という問答があって、そのあとで、13節に、

「イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。

井戸水は飲んだらまた渇く。

しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。

決して渇かないんですよ、また渇くというものではない。決して渇かない。

わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の生命に至る水が湧き出る」

と。イエスはこういうような約束をされている。サマリヤの女にこういうことを言われた。サマリヤというのは異邦人の地で、ユダヤ人からは軽蔑されていた所です。そういう所の女をつかまえて、

「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る」

と。泉となって湧き出るんです。これは

「異言がほとばしる」

と一緒ですよ。

「もう逆（ほとばし）って逆ってしょうがない」

という感じがここに出ています。それを小池辰雄は「ほとばしる」という言葉を使うのは、こういう

「もう湧いてしょうがない」

というような小池の体験がここでよく出ています。

同じようなことが、ヨハネ伝7章にも書いてある。37節、「生きた水の流れ」というサブタイトルがついている。

「祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がって大声で言われた。「渇いている人はだれでもわたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる。」イエスはご自分を信じる人々が受けようとしている〝霊〟について言われたのである。イエスはまだ栄光をお受けにならなかったので、〝霊〟がまだ降っていなかったからである。」

これは、霊がくだるまで、こんなのは分からないですよ。ところが、霊のことを言っておられるので、もう既にここで約束されている。

「自分のところに来て、決して渇かないわたしの水を飲みなさい」

と。そうすると、

「わたしのところに来て飲むと、信じる者は聖書に書いてある、

これは旧約聖書のことです。

その人の内から、

これは「腹から」とも訳すこともある。

腹から生きた水が川となって流れ出るようになる」

と、こう書いてある。これはさっきの泉の例えと一緒ですよ。ボコボコボコボコと泉が後から後から湧き出る、迸り出ている。これも、自分の腹からウワーッと水が大河のように流れるというような表現ですよ。それを小池辰雄は

「異言がほとばしり」

という。これはうちに留めておくことができない。泉だって蓋をすることができないでしょ。川の流れもせき止めることができない。せき止めたら、溢れて溢れてまた流れて行きますよ。それと同じように、神さまからもらう本当の御霊というのは、うちに留まっていることができない。それが

「力をもらう」

ということですよ。だから、どんどんどんどん、世界へ世界へ、外へ外へと溢れ出て行くようなことが、

「異言がほとばしる」

というようなことなんです。うちに決して留まっていることができない、そういうふうなものが「力」ということです。キリストからいただくものはそういうものですよ、というようなことがここから読みとれると思います。

そういう異言が迸る、御霊が迸る、御霊のバプテスマをはっきり受けなくてはこういう徴は伴わない。

「蛇を握っても、毒を飲んでも大丈夫だ、病人に手を按(お)けば癒される。そういう徴が伴うのだけれども、御霊を受けなければ、そういう徴も決して伴わない」

と。一般のキリスト教会は、そういうキリストの言葉をいい加減に読んでいるから、キリスト教会では何も起こらない。生き生きしたものが起こらないというようなことです。

「蛇を握っても、毒を飲んでも害を受けない」

とか、書いてありますけれども、

「そういうことを確信がなかったらやりなさんな」

と小池辰雄は言っている。

小池辰雄はハンセン氏病の病院で講演された時に――ハンセン氏病とは昔こわい病気で、今もそうなのかもしれないけれども――そういう所に行って講演なさった時に、

「何で小池辰雄はそういう人と握手もするのか」

とかいう話がありました。小池辰雄はそういう確信を持っていたから、そういう所であっても大丈夫だという確信があったから、小池辰雄はそういう人とも握手もされたと思う。ところが、なまじこう書いてあるから、

「毒を飲んでも大丈夫なんだ」

とか、そんなとんでもないことをしたら、やっぱりダメです。

「確信をいただいたら、そういうことをしたらいい」

ということです。けれども、実際に使徒行伝なんかを読んでみると、ちゃんと病人に手を按いて癒したり何かしてますよね。ペテロなんかもそんなことをしているわけです。そういう確信があれば、イエスの名によって何でもしたらいい。確信がない時に、生兵法ですよ、そんなことをしたら大怪我をしますから。ここに書いてあるけれども、それは確信がなかったらそういうことはしてはいけない。

これは僕は思うんですよ、聖書に書いてあることをそのまま信じたらいい。キリストは復活しました。別に今、復活体のキリストと出会う必要はない。

「ここに書いてあることをそのまま幼児のように信じたらいいだけ」

で、そういう現象に囚われたりしてはいけない。聖書にも十二分そういうことが書いてある。死人が甦った証例が三つも出てきます。病人が癒された。それを単純に信じて、

「そういう神さまなんだ」

ということを本当に信じておればいいので、今そういうことを現象として見たいとか――そういうことは起こりますよ、起こるけれども――そういうことばっかしを追っていくと、これは御利益信仰になってしまうということになります。小池辰雄は、

「使徒的信仰に帰れ」

と言う。これは僕らは何べんも聞きました。しかし、ここでは、

「使徒的信仰に立ち帰ろう！　と私は自らにきびしく告げているのである」

というように、ちょっと控えめに書いておられますね。

●聖霊降臨の約束

《またキリストは弟子たちに次のことも告げた。

「私は天でも地でも一切の権を与えられている。だからおまえたちは往って、諸々の国人を弟子となし、父と子と聖霊の名に在ってバプテスマを施し、私がおまえたちに命じたすべてのことを守るように教えよ。視よ、私は世の終りまで、いつもおまえたちと偕に在るぞ」（マタイ28・18～20）

このキリストの言が後の加筆であると学者たちはいう。使徒たちの信仰がこのような告白となったとしても、告白せしめたものは、その内実から見て、聖霊である。そうであるなら、主体が聖霊にあるわけだから、それはキリストの言として記されてあるとしても、その真理性において何らさしつかえはないことである。

このように、キリストは昇天の直前に、聖霊降臨の約束と、聖霊のバプテスマを土台として福音の伝道をすべきこと、そのような信仰者にはみたまの徴が伴うこと、すなわち、伝道は聖言のみならずカリスマ的み業が伴うことを確言して、然るのちに、

「**天に挙げられ、神の右に坐し給うた**」（マルコ16・19）
とある。
天は勿論霊的天界で、自然科学的な天ではない。「神の右に」とは、天界には地上的な右も左もないが、表現として「神の右に」と申して父なる神と共にその権能にあずかり給うことを語っているわけである。》
ここに、
「**父と子と聖霊の名に在ってバプテスマを施し**」
とあります。マタイ伝28章18節から20節は、
「後の教会的な加筆であろう」
というふうに判断する学者がいるというけれども。確かに小池辰雄がいうように、
「告白せしめたものは、その内実から見て、聖霊である」
というから、
「聖霊によって書かしめられたのだから、これをキリストの言葉でないと言う学者がおっても、そういうことは気にせんでもいい」
ということを小池は言っている。ここの137頁の最後の3行です。
「昇天する前にキリストが約束された重要なことが言われている」
というふうにここで小池辰雄がまとめてくれている。昇天のところでまとめてくれているのは、まず
「キリストは昇天の直前に、聖霊降臨の約束」
をされた。あなたがたに聖霊が降るという約束をまずされた。そして、
「その聖霊を受けたら福音は必ず伝道するようにあなたがたはなっていく」
というようなこと、伝道の約束ですね。そして、そのようになった弟子たちには御霊の権威がある。
「御霊の徴が伴うんですよ」
ということも約束されて、
「然るのちに、天に挙げられた」
というように書いてあります。これが「昇天」という「第八転　昇天」ということの意味づけをここで小池辰雄が言ってくれている。
昇天する直前にこういう約束をされた。実は、この約束は、別にここでばかり約束されたのではない。この約束はヨハネ伝の13章ぐらいから17章ぐらいまで全部、訥々としゃべっておられるでしょ。それが記録されているけれども、それが聖霊の約束をちゃんとヨハネ伝13章から――13章はあの
「洗足」
の儀式がありますね、足を洗ったり――そのあとで14章から17章までは

「イエスの遺訓」

といわれているようなものが述べられている。その時にやっぱり

「聖霊降臨の約束」

をちゃんと易しい言葉で語っておられる。ですから、昇天の意味は――第八転まで小池は書いているけれども――昇天することの意味はそういうところにあるんですよということで、わざわざ「昇天」というものをひとつのセクションとして小池辰雄が書いたわけです。

そういう聖霊降臨の約束ということについては、やっぱりヨハネ伝で見ていきたいと思う。ヨハネ伝15章ですね。その前に14章、

「聖霊を与える約束」

とここに書いてあります。これは、

「聖霊というものがどれだけ重要なことか」

ということを、もう既に昇天の前にしゃべっておられる。それをもっと分かりやすく語られたのが14章で、聖霊を与える約束ということことで、15節から読んでみます。

「15**汝等もし我を愛せば、我が誡命を守らん。16われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。17これは真理の御霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。18我なんじらを遺して孤児とはせず、汝らに来るなり。19暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。20その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。21わが誡命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己を顕すべし』22イスカリオテならぬユダ言う『主よ、何故おのれを我らに顕して、世には顕し給わぬか』23イエス答えて言い給う『人もし我を愛せば、わが言を守らん、わが父これを愛し、かつ我等その許に来りて住処を之とともにせん。24我を愛せぬ者は、わが言を守らず。汝らが聞くところの言は、わが言にあらず、我を遣し給いし父の言なり。**

25此等のことは我なんじらと偕にありて語りしが、26助主すなわちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。27われ平安を汝らに遺す、わが平安を汝らに与う。わが与うるは世の与うる如くならず、なんじら心を騒がすな、また懼るな。28「われ往きて汝らに来るなり」と云いしを汝ら既に聞けり。もし我を愛せば、父にわが往くを喜ぶべきなり、父は我よりも大いなるに因る。29今その事の成らぬ前に、これを汝らに告げたり、事の成らんとき汝らの信

ぜんためなり。30今より後われ汝らと多く語らじ、この世の君きたる故なり。彼は我に対して何の権もなし、31されど斯くなるは、我の、父を愛し、父の命じ給うところに遵いて行うことを、世の知らん為なり。起きよ、いざ此処を去るべし。」

この14章15節から最後のところ、これは「聖霊を与える約束」と、新共同訳にはそういうサブタイトルがついていて非常に分かりやすいんです。このヨハネ伝で語られたことを、昇天の、天に帰られるその直前に約束されたということが書いてあるけれども、

「キリストの昇天の直前に聖霊降臨を約束をされた」

と書いてあるけれども、ああいう短い言葉で言われたわけではなく、それまでにイエスは弟子たちを前にして、聖霊を与える約束をちゃんと切々と語っておられる。それが今、読んでもらったところです。

●弁護者（助主）を遣わす

文語訳の「助主」を新共同訳では「弁護者」と訳しています。

「父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。この方は真理の霊である」

と書いてある。

「決してあなたがたを孤児とはしない」

と。

「かの日には、その降臨がある日には、わたしが父の内に居り、あなたがたがわたしの内に居り、わたしもあなたがたにいることがわかる。」

と、こういう約束なんです。

「真理の御霊がきたら、それがあなたがたの内に宿る。決してあなたがたを孤児とはしない。御霊になってあなたがたの中に住んで、永遠にあなたがたと一緒に居る。だから、私が十字架で逝くのは非常にいいことなんですよ」

ということをここで約束されている。

「この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。わたしはあなたがたをみなしごとはしない。」

「全部、私のもとに来て、あるいは私があなたの中に入って、私と一緒に神の子になるんですよ」

ということをここで約束している。このあとにも、

「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。」

と。「言葉を守る」というのは、

「御霊によって言葉を守る」

ということです。

「わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む。」

と書いてある。これは

「孤児とはしない、あなたがたの中に生きている。一緒に住む、永遠にあなたがたと一緒にいる」

というように、

「私はあなたがたと一緒にいるんですよ」

ということを、繰り返し繰り返し、イエスは言っておられる。

「あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである。」

「わたしはしゃべっているけれども、これは父からわたしが預かった言葉をあなたがたにしゃべっているんですから、あなたがたが聞いている言葉は本当に自分の父、わたしをお遣わしになった父の言葉ですよ」

ということをイエスは言うわけです。繰り返して、

「弁護者を、助主（たすけぬし）を、わたしの名によってお遣わしになる」

ということ書いてあって、

「その聖霊がくると、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」

と書いてある。

「御霊によってしか、あなたがたはわたしが救い主であるということを決してわからない」

というような約束ですよ。

「私が語ったことをことごとく思い起こさせてくれる」

とか、

「それは御霊が来たら初めてわたしがあなたがたと一緒にいた時の言葉を全部思い出します、わたしがやったことが全部わかりますよ」

ということを約束してくれているんですね、イエスは。

「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。」

「御霊が来なかったら全然わかりませんよ」

というようなことをここで約束している。

●聖霊の働き

ヨハネ伝16章5節にもこういう言葉がある。聖霊の働きが書いてある。16章13節、

「しかし、その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語る」

と書いてある。「真理の御霊」、これはさっきの「助け主」、「弁護者」のことですけれども、

「その御霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる」

と。さっきの15章に書いてあるように、

「あなたがたにすべてのことを教え、わたしの話したことをことごとく思い出させる」

という言葉と一致します。

「真理の御霊がくると、その弁護者がくると、あなたがたに本当の真理を悟らせるんですよ」

という、16章でも同じような約束をしておられる。「聖霊の働き」というサブタイトルがついているところを読んでみますと、7節に、

「しかし、実を言うと、

この「実を言うと」という言葉はよく出てくる。これは

「本当にあなたがたに言いますよ」

という、言葉を改めて本当の大切なことを言う時に、「実を言うと」とか、

「本当に本当にあなたに伝えますよ」

という、前置きの言葉がある。「実を言うと」というと、何かすごく弱い言葉ですけれども、

「本当に大切なことを言うよ」

という時に、こういう言葉を使う。

「実を言うと、わたしが去って行くのはあなたがたのためになる。」

と。本当にこれは重要なことですよ、

「わたしが十字架で去っていくことは非常に大切なんですよ」

という言葉です。

「わたしが去って行かなければ、

十字架で私が死ななければ、

弁護者は、助け主は、真理の御霊はあなたがたのところに来ないからである。わたしが十字架で行ってしまえば、弁護者を、御霊をあなたがたのところに送る。その方が来れば、罪について、義について、また、裁きについて、世の誤りを明らかにする。」

「この真理の御霊が来たら、すべてのことが分かります、すべてを悟らせますよ」

という約束です。

「その時がきたら、罪のことも義のことも裁きのことも全部あなたがたは分かりますよ」

ということなんです。

「罪について分かる」

ということはどういうことかというと、

「彼らがわたしを信じないこと」

これが罪なんです。罪というのは、

「神さまを信じないこと、神さまから離れること」

が罪なんです。だから、罪というのは、単純にいったら、

「キリストを信じないということが、神さまから離れていることが罪なんですよ」

ということで、「罪」と書いてある。

「罪についてというのは、彼らがわたしを信じないこと」

キリストを信じなかったら、これは「罪される」ということと一緒なんです。

「義についてというのは、わたしが父のもとに行き、あなたがたはもはやわたしを見なくなる。これが義ですよ」

ということ。これは小池辰雄がよく言っているけれども、

「わたしが父のもとに行く」

ということは、

「十字架を背負う、十字架で死んでしまう」

ということです。十字架で死んでしまうということは、父なる神さまをイエスが徹頭徹尾それに従ったでしょ。もう文句一つ言わないで従った。十字架の道を歩まれた。それが「義」なんです。

「神さまの言うことをそのまま十字架の道で進んで行ったということが義ですよ」

ということをここで言っている。

それから、「裁きについて」。これはキリストを信じなかったら、これは罪されますよ。

「わたしの言葉によってあなたがたは既に裁かれている」

というような言葉がイエスの言葉として残っています。だから、

「信じない者は既に裁かれいる。それは御霊が来たらわかるんですよ」

というようなことです。だから、

「罪について義について裁きについて、真理の御霊が来たら、全部それが分かりますよ」

というようなことなんです。そして、その最後に、

「真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聞いたことを語る」

というようなことを、聖霊の働きの最後にこういうことをイエスが言ってくれている。そういうことで、

「キリストが昇天の直前に聖霊降臨の約束をされたというようなことが、昇天していく時の重要なことだ」

と言ったけれども。これはこんなふうに、もうヨハネ伝で切々とイエスが弟子たちに語られた約束であることを、改めてもう一度、昇天の直前に言われた。それが「御霊の約束」ということでヨハネ伝にきちっと書いてある。

ここで「御霊の働き」ということを考えていくと、さっき読んだように、

「いろんな徴が伴います、異言が迸ります、病人に手を按けば癒されます」

というふうなことが約束されているけれども、御霊の働きというのはまず、

「非常に神さまの平安をいただく」

さっき「平安」という言葉が出てきましたけれども、

「あなたがたと一緒に住んで、決してみなしごとはしない。永遠にあなたがたと一緒に住んでいることがわかる」

というのが御霊の働きの一つの機能です。それから、さっき言ったように、

「罪や義や裁きについてもわかる、真理がすべてわかる。御霊にあれば人からいろんな智慧を教えてもらう必要はない。御霊が全部教えてくれます。御霊がくると、喜びが溢れてきます。御霊がくると、段々、人に言わないでおれなくなって、喜びが溢れてくる。伝えないではおれないんですよ」

と。「伝道すべき」というと、これは義務みたいになってしまいます、

「伝道しないといけない」

とかね。これは教会なんかは全部、「伝道しないといけない」とか、そういう義務になってしまう。そうではない。喜びがきて、本当に十字架をもらったら、

「たとい、人が何と言おうとも、キリストに愛されて、キリストの十字架をいただいたら、これはもう語らざるをえない」

というような心境が出てくる。

「伝えないではおれない」

という、これが御霊の働きです。それから、

「癒しの力」

とあります。パウロが、

「御霊の実」

ということでガラテヤ書で言っている。御霊のない人は、

「偶像礼拝、好色、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、泥酔、酒宴」

とか、御霊がなかったら、そういうことが起こりますと言ったあとで、それに対して、5章22節、

「霊の結ぶ実は愛であり、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です。」

と、こんなふうに御霊の実があげられ、御霊とはどういうことをしてくれるかというと、

「喜びであり、平和であり――これは平安ですね、平和であってもいい――寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制です」

と、ガラテヤ書でパウロが言っている。御霊の働きというのはいくつもあります。そういうことをここで――聖霊降臨の意味ですね――御霊がどれだけ大切な役目をしてくれるかということを小池は切実に言うわけです。

「御霊のバプテスマ、御霊のバプテスマ」

と、もう僕らは散々聞きましたけれども、御霊とはどういう機能を我々に果してくれるのかというようなことを、ちょっと学んでいきたいなと思って、ここを読みました。

●天に挙げられる

それから、今読んでもらったところで、

「天に挙げられる」

というのはどういうことか。僕らには分からないですよ。聖書に、

「雲に覆われて天に挙げられた」

というふうに書いてありますけれども、具体的に我々は実感として何も分かりませんよね、

「天に挙げられる」

とはどういうことか。この「天」はもちろん霊的天界であって、自然科学的な天ではない。自然科学的な天とは何か、それは僕は知りませんけれども、今は自然科学がもの凄く発達した時代でしょ。自然科学は因果律ですよ、原因があって結果が出る。それが自然科学です。自然科学者は、

「別次元の天がある」

なんて考えてない。多くの科学者はこの世のことだけです。新聞の記事も、テレビの内容も全部この世のことだけです。

「また別次元がある」

ということをみな理解していない。自然科学と信仰とをゴッチャにしているところがある。これは全然別なんです、

「自然科学と天界のことは全く別」

なんです。だから、キリストが復活なさって天に挙げられたというこの事実、これは信じるしかない。

「信じるしかない」
というのは、無理に信ずるのではない。
「御霊がきたら、これは当たり前だと思って、信じられるようになる」
というようなことです。「天」というのは、
「二、三人わが名によって集まるところに我も居るべし」
という。「天」というのは、本当にそばにキリストは居られる。遠いところに居られるのではない。
「我々が集まっていると、そこにキリストも見えない姿で立っておられる。もうその隣に天がある」
ということです。天は何か「上の方にある」とかではない。もうこの間際に全然次元の異なるところに天界があって、そこにイエスが生きて居られる。
イエスが昇天されて生きて居られなかったら、僕らが祈ったりするのは無意味です。キリストが本当に生きておられないと、我々の祈りというものは何のために祈るんですか。キリストが生きておられなかったら、祈る意味は全然ないわけです。だから、こういうように集まったところにキリストは天界から、本当にそばでキリストは一緒にいてくださっているんです。
「**必ずわたしはお前を孤児（みなしご）とはしない**」
ということだから、もうそこに居られるんです。
「それを幼児（おさなご）のように単純に信じてほしい」
ということです。だから、自然科学者は不幸ですよ、違う次元のことが全然分からないから。ここで、
「天は勿論、霊的天界で、自然科学的な天ではない。」
という。僕は他のところでいろんな話を聞くと、聖書に書いてあることは荒唐無稽なことが多いでしょ。聖書に書かれていることは荒唐無稽なことが多いですよ。旧約聖書から始まって新約聖書も、
「死んだ人が生き返る」
とか、あれが決定的にとんでもないことでしょ。
「**死んだ者が生き返った**」
という記事も載っているし、旧約聖書でもいろんなことが書かれていますね、あの出エジプトの所でもいろんな異現象が起こって、民が導かれて行きます。ああいうことも何か神話みたいに思ったりするわけですよ。
「旧約時代だから、あれは神話だ」
とかいうふうになっている。また、違う人はそれを合理的に説明するために、
「あれは信じているから、そういうふうに見えたんだ」

とか、そういう合理的な判断をしようとする。やっぱり、

「自然科学とこの聖書の世界とは全然異次元である」

ということを納得してくれないんですよ、そういう人は。だから、聖書をそういうように改竄（かいざん）していくわけです。合理的に判断しようとする。あれはとんでもないことなんです。そんな改竄していくと、もう聖書はなくなってしまう。異常な出来事を全部除けてしまったら、聖書なんて何もなくなってしまう。そういうふうなことをキリスト者でも考えている人がいるということです。けれども、小池辰雄は、

「一から十まで聖書に書いてあることはその通りだ」

と言っている。我々もその通り信じないと、これはもう信仰ではなくなってしまうんです。それをなくしてしまうと、これはもうただのつまらない本になります。

だから、そういう自然科学者の人と、あるいは信じない人と無駄な争いをしてもしょうがない。もう全然かみ合わない。そういうことを無駄な議論してもかみ合わないからもう、

「自分がそれを信じてそれを喜んで生きる」

ということしかしょうがない。御霊は決して、御霊でないと人からは理解してもらえない。だから、小池辰雄は無教会から出ましたでしょ。無教会から出たけれども、無教会の人は小池辰雄にもの凄く冷たかった。理解してもらえない。そういうふうに理解してもらえないのは当たり前なんです、次元が違うから。そういう意味では無駄な議論は避けた方がいい。それよりも、

「信じて楽しく喜んで生きていく」

ということが一番大切なことなんですね。

●地の極まで

《使徒行伝第一章に記してあるように、イエスは十字架の贖罪死を成し遂げたのち、多くのたしかな証示証言をもって、復活の事実を使徒たちに示し、四十日間、しばしば彼らに現われて、神の国のおとずれを語り、彼らの集まりの中に在ってこう命じた。

「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待っていなさい。ヨハネは水で回心のバプテスマを施したけれども、おまえたちは間もなく聖霊でバプテスマされるのだ！」

その後、更にはっきりと弟子たちにこう語った。

「……聖霊がおまえたちに臨むと、おまえたちは霊的な力を受ける。そうしたら、エルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、更には地の極（はて）までわたしの証人となる」（行伝1・8）（ルカ24・49参照）

これは復活のイエスの最後の決定的な聖言であった。使徒たちをベタニヤの方、橄欖（かんらん）山に連れゆき、手を挙げて彼らを祝し給う間に、天界へイエスは挙げられた、霊

雲に迎えられつつ（ルカ24・50）。

慕わしさと霊感に満ちて昇りゆくイエスをかれらが仰ぎ見ていたとき、白衣の天使か、預言者か、二つの影が傍らに立って告げるのに、

「ガリラヤの人々よ。何故天を仰いで立っているのです。あなたがたを離れて天に挙げられ給うたこのイエスは、天に昇りゆくをあなたがたが今見たように、再び来たり給うのだ」（行伝1・11）

イエスの昇天の際、既に再臨まで約束されていた。キリストは今もなお、歴史の終末に至るまで、霊界の天に君臨して在り給う。み霊は自由自在にわれらに降り、み霊のキリストとして誰を通してでも働き給う。キリストが昇天したということは、顕然たるキリストの実存の一転機であった。キリストが天界に現在する霊的事実の根拠は正にキリストの昇天、霊的天界への突入という啓示的事実に由るのである。》

ここは最後のところですけれども、

「使徒行伝の所に書かれているように」

と書いてあって、

「聖霊がおまえたちに臨むと、おまえたちは霊的な力を受ける。そうしたら、……地の極まで私の証人となる」

と。この当時は、「世界」というのはあの辺だけだった。異邦人の所へ行ったのがパウロだったけれども、「全世界」というのはあの時はまだ小さかった。今は全世界というと地球規模です。もうキリスト教を知らない国はないくらい広まっているけれども、実際はキリストというものを本当に救い主と思っている民族はもの凄くわずかだと思う。小池辰雄がこれだけ一生懸命にやった理由は、今のキリスト教界に失望しているというところがあります。だから、こういうことを書いて残したのだと思う。今はキリスト教会は全世界にあるけれども、

「本当に聖霊が臨んでいるかどうか」

ということです。

「地の極まで私の証人になる」

という。その当時は物理的に地の果てまで行くような、もの凄い勢いがあったでしょう。幕末なんかは、ヨーロッパからわが国に来て宣教しましたでしょ。それが地の果てだと思っていたけれども、「地の果て」というのは、我々の生活の中が本当に惨憺たるものなんです。本当に地の果てへ、遠くへ行かなくてもいい。我々の周りが地の果てなんですよ、知らない人がいっぱいいるから。物理的に地の果ては、その当時はそうだったでしょう、もうそこしか世界は知らなかったから。ユダヤ教しか知らなかったから。

「異邦人に伝える」

というのは

「地の果てまで行く」

ということなんですけれども、今はそうではないですよ。みんな知っているんだけれども、本当の信仰に生きていないというところがあるから、我々の周りが本当に地の果てなんです。知らない人がいっぱいですもの。キリスト・イエスのことを知らない人がいっぱいいる。だから、これを何とかして、隣人に伝えるというのが我々の役目なんです。それで、

「わたしの証人になってほしい」

という。この「証人になってほしい」というのは、何もキリストのことを語らなくてもいいんですよ、嬉しく生きておれば。その人が何であんなに嬉しいか。それが理解されなくても、これはしょうがない。理解されないんだからもともと、もう次元がちがうから。そんなものに一喜一憂せんと、

「ただ喜んで、キリストを喜んで生きて居ってほしい」

と。僕の願いもそうですね。そうすると、それが百人のうち一人でも気付いてくれたら、それはしめたものです。それほど、キリスト者というのは少ないということですから。

「地の極（はて）というのは僕らの周りにいっぱいある」

というようなことです。

●御霊の力

それから、「御霊の力」ということ。これは使徒行伝でペテロが足の悪い人を立ち上がらせましたね。あれが本当の「力」なんですよ。小池もよく引用しますけれども、使徒行伝3章です。8節に、その足の悪い人が、

「躍り上がって立ち、歩きだした。」

と書いてある。躍り上がって立ち上がったんですよ。そしたら、周りの人が奇異に思います。今まで足が悪かった人が躍り上がって歩きだした。そしたら、みんなびっくりして、そしてペテロが言う言葉が12節に書いてある。

「これを見たペトロは、民衆に言った。「イスラエルの人たち、なぜこのことに驚くのですか。」

と。躍り上がって歩いて行ったから、みんなびっくりしているでしょ。

「そんなのをなぜ驚くのですか」

と、ペテロが言うわけです。ペテロとかヨハネとか何人か居った。その時に、ペテロが代表でこう言った。

「わたしたちがまるで自分の力や信心によって、この人を歩かせたかのように、なぜ、わたしたちを見つめるのですか。」

これは自分の力や信心と、キリストの力とを混同しているところがある。だから、十字架を本当に受けとらないときには、その御霊の力は自分がやったというふうに思う。ところが、

これはペテロはこの時、
「自分の力ではない」
ということをはっきり悟っている。
「これは十字架によって自分が贖われたそのキリストの力でこういうことをしたのに、何であなたがたは自分の力で、ペテロたちの力で歩かせたかのように見るのか」
ということを言うわけです。自分の力や信心、念力ではないんですよ、これは。そういうことを是非とも知っておいてもらいたいんです。
「お前たちは霊的な力を受ける」
と書いてある。
「聖霊がお前たちに臨むと、お前たちは霊的な力を持つ」
と。これが霊的な力です。
「病人に手を按いたら癒される」
それを実践したのがペテロやヨハネたち、最初の使徒行伝の所で弟子たちが奇跡を行ったわけです。
これは「全部、聖霊によって何かをした」というようなグループもありますよ。そうすると、自分の力でもってやったかのように思う。だから、小池は、
「霊的な傲慢は絶対にダメですよ」
ということを言っているでしょ。
「観念信仰はダメですよ、霊的傲慢はダメですよ、御利益(ごりやく)もダメですよ」
と言っているのは、
「十字架によって贖われたその平伏しの魂で初めて言える言葉」
を小池は残しているんです。ここでも、霊的な力を受けた時に、ペテロが言うように、
「これは神さまの力です、キリストの力です。決して自分の力や信心や信念でこういうことをしたのではない」
ということをはっきり言っている。この区別をはっきりしておかないと、霊的傲慢になったりする。また、「霊を知らない」とありましたね、
「あなたがたは霊を知らないから、霊のことは分からないんだ」
というイエスの言葉が残っています。パウロも同じようなことを言っているけれども、そういうのがないのが無教会だった。だから、無教会は
「十字架、十字架」
とだけ言って、御霊が来てないから、ほんまに頭の信仰だった。それを小池は散々体験したものだから、
「観念信仰はダメですよ」
と言った。それから、手島さんのような所は十字架が抜けているから傲慢になってしまった。

霊的傲慢に。だから、あれも小池は戒めたでしょ。それから、

「御利益、御利益と言っているのもダメですよ」

ということを小池は言った。そういうところに、小池の健全さがあります。

「小池の信仰は非常に健全である」

ということを改めて思いなおしてほしいと思います。ああいうことを言っているのはそういうことですね。

最後に、ちょっとこう書いてあります。

「み霊は自由自在にわれらに降り、

本当にそうですよ、そして、

み霊のキリストとして誰を通してでも働き給う。」

と。この

「誰を通してでも働き給う」

というのは、小池はその本当の気持を言っている。「誰を通してでも」と。決して偉い人を通じてとか何かではない。

「誰でもキリストに在る者は、その人を通じて働く。もう例外はない。誰を通じても、キリストのところに来た人は、誰を通じてでも働き給う」

というようなことを小池は言うわけです。

だから、天界にイエスが行かなかったら、聖霊降臨も起こらないし。

「イエスが霊界、天界へ突入して行った」

と書いてあるでしょ。この聖書には

「雲に覆われて天に行った」

とかいう穏やかな表現をしてありますけれども、小池はそういう穏やかな表現は避けて、

「キリストの昇天、霊的天界への突入という啓示的事実に由るのである。」

というようなことを言ってくれている。僕らは散々聞きましたでしょ、

「突破突入」

とか。イエスが天界へ行く時も、

「霊的な天界へ突入して行った」

というような表現をここで小池は言ってくれているということです。

第八転「昇天」を大体ここで終わりたいと思います。その次は「聖霊降臨」ですね。